

# 天地人

第17号 No.17

Mar 2012

ISSN 1882-3580



陝西省神木県大柳塔炭鉱。中央左手の黒い山は運び出し用に積まれた石炭。右手はぼた山。奥の土が盛られた部分は、これから緑化が行われるところ。  
2011年9月8日寇森撮影

## Contents

中日両国の環境保護協力を強化し、共に美しい未来を創る

劉毅仁 — 2

書評：中国環境問題研究会編『中国環境ハンドブック 2011 - 2012年版』

秋道智彌 — 4

世界の屋根で新たな道をたどる

ピーター・ウィガンド — 6

地下温暖化に関する日中合同シンポジウムの報告

谷口真人 — 8

国際シンポジウム「乾燥地における開発と環境保全」の報告

金紅実 — 10

天地人総目次（創刊号～17号） — 12

研究会報告・お知らせ — 16

強化中日両国の環境保護協作，共創美好未来

刘毅仁 — 2

书评：中国环境问题研究会编《中国环境手册 2011 - 2012年版》

秋道智弥 — 4

在世界顶上追寻新的道路

WIEGAND, Peter — 6

关于地下变暖的日中研讨会综述

谷口真人 — 8

“干旱区开发与环境保护”国际研讨会综述

金红实 — 10

天地人总目录（创刊号～17号） — 12

研究会报告、最新动向 — 16

Fostering China-Japan cooperation for protecting the environment and creating a beautiful future

LIU, Yiren — 2

Book Review of Handbook of Chinese Environmental Problems - 2011-2012 edition edited by the China Environmental Problems Research Group

AKIMICHI, Tomoya — 4

Tracing new paths on the roof of the world

Peter Wiegand — 6

Report of Japan-China workshop on subsurface warming

TANIGUCHI, Makoto — 8

Report of the international symposium: Development and Environmental Protection in Arid Lands

JIN, Hongshi — 10

Tenchijin's general table of contents for Vol. 0-17 — 12

Report of workshop and currents — 16

# 中日両国の環境保護協力を強化し、共に美しい未来を創る

中華人民共和国駐大阪総領事 劉毅仁



人類の生存環境を保護することが、国際社会の共通課題である。中日両国は悠久の文化交流の歴史を持ち、「環境と人間」の関係に対する両国国民の認識が古来共通している。そして、中日両国の環境保護協力は今や両国協力関係の重要な一部となっている。

中日両国国交正常化が実現して以来、環境保護分野における協力が着実に展開されてきた。1977年、日本環境代表団の初めての訪中が、中日環境保護協力の第一歩となった。1980年代、両国の環境保護協力が実務段階に入り、政府間の対話や、研究機関及び民間団体の交流が盛んに行われていた。90年代、両国政府が一連の環境保護協定に調印し、協力の強化に関する共同声明を発表した。両国政府が民間の各分野にわたる多種多様な交流・協力を推奨し、協力基金をも設立した。このような両国政府と各界の努力のもとで、中日環境保護協力の成果が著しく、経済・技術協力を連動させただけではなく、両国戦略的互惠関係の内容をより充実させた。

近年、人類社会の直面する自然災害と社会問題が増えつつある。特に国際金融危機が発生して以来、われわれ人間は、過去を反省し、未来への道を模索している。調整と変革で経済成長を図り、省エネルギー・環境保護を社会経済の基軸と位置づけ、強化することが各国の現実的かつ緊迫した任務である。

中国の社会経済が重要な発展段階にある。経済発展のモデル転換を加速させ、経済の成長と省エネ・環境

保護・気候変動対応を有機的に結合することが、持続可能な発展を実現するための必須条件となっている。一方、日本は経済復興のために低炭素産業の成長と省エネ・環境保護技術の運用を図っている。中国は豊富な人的資源と巨大な市場を持つのに対し、日本は先進技術とノウハウを有する。両国の環境保護分野における互恵的な協力が、必ずや双方に実際の利益をもたらすことができるだろう。

2011年11月、中日省エネルギー・環境保護総合フォーラムが北京にて開催され、官民関係者合わせて約1000名を超える参加を得て、過去最多となる51件の協力プロジェクトに調印し、成功裏に終わった。中国国務院副総理の李克強がフォーラムの開幕式に出席し、挨拶で中日両国省エネ・環境保護協力に対する期待を語り、以下のような提言をした：

第一に、両国の政策対話を強化する。発展モデルと管理ノウハウについて交流し、エネルギー問題について活発に協議することにより、国際エネルギー市場での発言権拡大、エネルギー消費国の利益と世界のエネルギー安全を図る。

第二に、両国政府が確定した協力プロジェクトを着実に推進する。その中で、技術が先進で、効果が顕著である大型プロジェクトに対し、政府が資金面で支援する。

第三に、技術を中国で応用する。日本側が省エネ・環境保護に関する先進技術をより多く中国に導入し、技術によって市場を開拓することを期待している。中国は双方の企業や研究機関の共同研究・開発を奨励し、知的財産権保護を一段と強化する。

さて、2012年は中日両国国交正常化四十周年という節目の年である。中日両国の省エネ・環境保護協力がこの記念すべき年にさらなる発展を遂げ、両国国民のためにより美しい環境を創ることを、心より祈念いたします。



第六回中日省エネルギー・環境保護総合フォーラム（新華社提供）



## 强化中日两国的环境保护协作，共创美好未来

中华人民共和国驻大阪总领事 刘毅仁

保护人类生存环境是国际社会共同的课题。中日两国拥有悠久的历史交流史，自古以来两国人民就对“环境与人类”的关系有着共同的认识，并且，中日两国的环境保护合作现已成为两国合作关系中的重要部分。中国拥有丰富的人力资源和巨大的市场，而日本拥有先进

技术和专有技术，通过两国在环境保护领域的互惠合作，相信一定能给双方带来实际利益。2012年是中日邦交正常化四十周年，我衷心祝愿中日两国的节能与环境保护合作在这值得纪念的一年里能取得更大发展，为两国人民创造更美好的环境。

## Fostering China-Japan cooperation for protecting the environment and creating a beautiful future

LIU, Yiren

Consul general of the People's Republic of China in Osaka

Protecting the living environment for the benefit of humankind is a common task for the international community. Since ancient times, China and Japan have shared a history of cultural communication and a similar outlook toward the relationship between humans and nature. In addition, cooperation for environmental protection is an important aspect of the cooperative relationship between the two countries. China has a great deal of manpower and a large market, while Japan has

advanced technologies and technical know-how. Cooperation for environmental protection will be mutually beneficial. The year 2012 is the 40th anniversary of the normalization of diplomatic relations between China and Japan. We sincerely hope that cooperation for energy conservation and environmental protection between the two countries in this memorable year will progress and help build a more beautiful future for the citizens of both nations.



李克強副總理が挨拶（新華社提供）



枝野大臣が挨拶（新華社提供）

# 中国環境問題研究会編『中国環境 ハンドブック 2011－2012年版』



総合地球環境学研究所 秋道智彌

本書の表紙に黄河河口部の衛星写真がある。1979年と2000年のものとを比較したもので、黄河の運搬する黄土が新たに半島を形成したことがわかる。わずか20年あまりの間における自然の変化であるが、もっと短い時間内に発生した劇的な攪乱をわたしたち日本人は経験した。その影響はこの先、20年後でも依然として不透明であるのだろうか。

周知の通り、2011年3月11日に発生した大地震津波は、けっして消えることのない深くて悲しい記憶となった。そして、福島ではチェルノブイリの原発事故以来の悲惨な事故が起こった。想定外という用語があたかも当然のごとくまかり通ることに怒りを包み隠さない人はすくなくはないはずだ。3・11を受けて、本書の編集委員会は構成内容の大幅な変更を決意した。2004年以来、4冊目となる本書の刊行が秋にずれ込んだのはそのためである。だが、中国の原子力エネルギー問題を正面から取り上げたことで本書の意義が格段に増した。

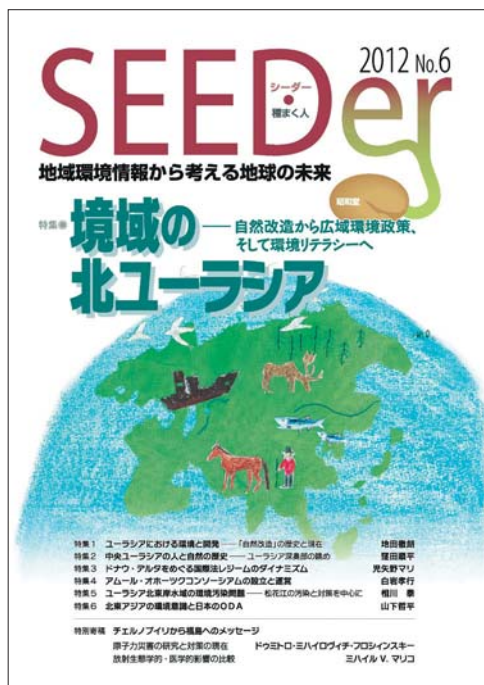
本書は2部の特集と貴重な情報を満載した4部構成のデータ・資料、それと付録の文献からなる。第1部は中国における環境問題への多様なアプローチを提示したものだ。そして第2部は環境問題の最前線となるトピックスが取り上げられている。注目すべきは第2部で、中国におけるモータリゼーションを巡る諸問題と原発問題が興味を引く。原発問題では、郭四志氏（帝京大学経済学部）と安江伸夫氏（テレビ朝日）が執筆されている。また原発関連のコラムとして、松本優氏（東京海上日動火災保険）と翟国方氏（南京大学）も興味ある情報を現場の中国から提供されている。

日本では原子力発電所はもういらぬとする議論がある。しかし、中国ではこの先世界の4割に当たる数の原発を建設する計画がある。これまで、「原発」イコール「環境保護」とする大きな前提のもとに計画が進められてきたことの証である。津波発生の数日後の3月14日、中国は全国人民代表大会で原発5倍計画



を採択した。しかし福島事故はそうした計画の変更と修正を余儀なくした。コスト面や安全性ですぐれ、環境への汚染などがもっとも少ないとされた原発が、じつは環境に多大な汚染をもたらし、人間生活や経済活動にのっぴきならない悪影響を及ぼすことが福島事故で明らかになったからだ。原発の事故による環境汚染と経済的な損失が中国の原発推進派を躊躇させることになりつつある。

じつは福島事故の前にあったチェルノブイリ事故のその後について、ロシアからの情報はそれほど十分に開示されてきたわけではない。ごく最近、われわれの仲間がロシア人研究者2人によるチェルノブイリ事故に関する最新レポートを入手した。福島事故を受けての寄稿である。これらを北海道大学スラブ研究所で翻訳し、地域環境情報にかかわる雑誌『SEEDer』の6号で掲載することになっている（昭和堂より2012年3月発行予定）。中身をみると、とくに健康面での深刻な放射能汚染の実態が明らかにされており、今後、日本の場合にも慎重かつ長期的な観察が必要であることを示唆している。



フクシマにおける事故発生から、情報の隠ぺいと米国からの災害援助の拒否など、不可解なことがあいついで起こり、日本政府と東京電力による対応が

国際的にも大きな疑惑を招いたことは周知のとおりである。中国でこうした事故の際にはどのような対応をするのかについて想定することも肝要だ。最近にも温州市で発生した高速鉄道の事故直後、破損した列車を地中に埋めてしまう愚行があった。これなどは目に見えるだけに単純な隠ぺい工作といえようが、目には見えない放射能汚染はまた別だろう。中国では、フクシマの原発から海中に流れ出した汚染物質の影響で海産物の塩は汚染されるというデマが流れ、塩が飛ぶように売れたという。フクシマ産の野菜や食品の不買運動もこれと通底する面があり、決して他人事ではない。ロシアと中国が日本海における海洋調査に乗り出したと聞くが、日本はこれに加わることはなかった。汚染物質をタレ流しする国であるという烙印をおされたからだ。

今回の事故を踏まえた中国の対応はたいへん示唆的であり、今後とも継続的に追いかけるべき課題だろう。来年度版の中国環境問題ハンドブックの編集に向けて関係者各位のなご奮闘に期待したい。

## 书评：中国环境问题研究会编《中国环境手册 2011 - 2012 年版》

综合地球环境学研究所 秋道智弥

此书之所以在特辑中提到核电站问题，是因为日本大地震及福岛第一核电站事件。中国政府本来以“核电站”为“环

保”，推动核电站五倍增计划。但福岛事件使中国政府修正原有的看法，今后的动向引人注目。

## Book Review of Handbook of Chinese Environmental Problems - 2011-2012 edition edited by the China Environmental Problems Research Group

AKIMICHI, Tomoya

RIHN

In this Handbook, several aspects of updated Chinese environmental problems have been provided. Special topics on motorization and atomic power stations have also been discussed. It should particularly be noted that the Chinese national policy on

atomic power stations has been reconsidered, following the March 2011 tsunami disaster in Japan, which revealed that atomic power stations are not compatible with environmental conservation but a serious threat to both human security and the environment.



# Tracing new paths on the roof of the world



Peter Wiegand Trace Foundation

Tibet is land of superlatives. One of the highest, coldest, driest, and most sparsely populated places on earth, the Tibetan Plateau is a truly unique region and home to one of the world's great civilizations. It is also one of the most challenging places on earth to deliver human services. Yet, for the past 18 years, Trace Foundation has worked in the fields of education, healthcare, rural development, and cultural preservation and development to improve lives and strengthen communities across the plateau. Over the course of our nearly 20-year history we have supported the publication of more than a million Tibetan-language books, built or renovated 50 schools and clinics and, with more 1000 active scholarships a year, become the largest provider of student-support to Tibetans in the world. As of 2011, we have made a total investment of over \$70 million (USD) in the future of Tibetan communities.

Trace Foundation was born out of the experiences of Andrea Soros on the Tibetan Plateau. After finishing her undergraduate degree at the University of Chicago in 1990, Ms. Soros celebrated with a bike trip across China, which brought her to the Tibetan Plateau for the first time. Struck by the profound natural beauty of the region and the warmth of the people she met there, Ms. Soros immediately felt a deep affinity with the region. The next year she returned, this time to the town of Chabcha in Tsolho (Hainan) Prefecture, in southern Qinghai, to

teach English. The experiences she had and conversations she began there gradually grew into the Foundation, which was established in 1993.

Trace Foundation supports the continuity and development of Tibetan language, culture, and places, and works to improve lives and strengthen communities on the Tibetan Plateau. The Foundation partners with organizations and individuals throughout the region to drive economic and social development and strengthen local culture. Trace Foundation's first direct intervention in Tibetan areas came in the winter of 1995, following a devastating winter storm in western Sichuan Province. In the following eight years the Foundation gradually established a presence across the plateau, opening three field offices, and supporting projects in each of the five provinces that are home to Tibetan communities in the PRC.

In 2003, we expanded our approach and took up direct implementation of our own development projects. Through our projects we sought to guarantee greater accountability, coherence with our stated aims, and directly measurable impact over years and even decades. In 2004 we launched our first cycle of projects. These first projects focused on critical areas in the development of Tibetan communities, including teaching-methodology training, rural income generation, and support for Tibetan medicine.

In the spring of 2008 a wave of

civil unrest shook the Tibetan Plateau, claiming a number of lives. The resulting crackdown and ongoing tightening of restrictions has severely curtailed the work of international non-governmental organizations in the region. Trace Foundation has, however, remained committed to our mission. Recognizing the challenges of the present environment, we have continued to adapt and to seek out new opportunities to collaborate and cooperate for positive change for Tibetan communities.

Building on the efforts begun in 2003 with the establishment of the Foundation's Latse Library, the premiere research library dedicated to contemporary Himalayan cultures and societies, we have expanded our efforts at our headquarters to raise awareness of contemporary Tibetan communities and to build knowledge about the Tibetan Plateau. Through diverse public programs we explore the current state of the region and models for economic and social development. Between 2008 and 2010, we held our first lecture series, *Minority Language in Today's Global Society*, to highlight global strategies for minority language preservation and development, with a special comparative focus on the Tibetan case.

In 2008, we launched our new research fellowship. The fellowship seeks to expand research on Tibetan culture and issues critical to the economic and social development of the

region. It further provides opportunities to researchers both in the PRC and around the globe who would otherwise be unable to pursue fieldwork.

Through our ever-expanding network of fellows, scholars, grantees and

friends, the Foundation seeks to keep alive the conversations that began 20 years ago in Chabcha and have guided us ever since. As we look to the future, we continue to adapt to the ever-changing circumstances of life in

this unique corner of the world, while remaining true to our long-standing vision of vibrant Tibetan-communities, rooted in their heritage, and thriving in the modern world.



Elementary school



Yaks and livelihood on the Tibetan Plateau

## 世界の屋根で新たな道をたどる

トレース基金 ピーター・ウィガンド

20年あまり、トレース基金はチベット高原の人々・環境・文化をサポートするために尽力してきた。ここは地球上でもっとも標高が高く、寒冷で乾燥した場所である。ここで生活を営むコミュニティは、経済・社会発展において、独自の困難に直面している。これらの困難に対し

て、トレース基金は総合的なアプローチをとり、学校建設、教師訓練から、奨学金、飲料水、所得創出、チベット医学トレーニング、文化保護、美術品の支援まで幅広いプロジェクトを展開している。

## 在世界顶上追寻新的道路

利众基金会 Peter Wiegand

二十年来，利众基金会支持西藏高原的居民、环境及文化。在地球上，西藏高原是标高最大、干燥而寒冷的地方之一。生活在这里的共同体在经济、社会发展上都面临着独特的困难。对此，立众基金会采取全面的方法来解决。例

如基金会进行建设学校，培训教师，提供奖学金和饮用水，创出所得，训练西藏医学，保护文化，支持美术品等多方面的项目。

# 地下温暖化に関する日中合同シンポジウムの報告



総合地球環境学研究所 谷口真人

住友財団の環境研究助成を受けて、2010年—2012年に日中共同で行われている「アジアの都市における地下温暖化に関する比較研究（代表：谷口真人）」に関する日中合同ワークショップが、中国環境問題研究拠点の共催を得て、2011年9月28日—29日に、中国西安交通大学で開催された。

都市域への人口集中に伴う様々な問題は、世界人口の半数以上がすでに都市に住む現在、大きな地球環境問題である。中国でも都市への人口集中は激しく、様々な環境問題が発生している。今回のシンポジウムの目的は、都市化が進むアジアの中で、特に日本と中国の都市を比較して、ヒートアイランドの影響がどのように“地下温暖化”として表れているかを比較検討するものである。現在進行しつつある都市域におけるヒートアイランド現象と地球温暖化は、地表面温度を上昇させ、その結果、熱が地表から地下に運ばれ蓄積されてゆくため、地下温度を徐々に着実に上昇させてゆく。すなわち、“地下の温暖化”が進行している（Taniguchi et al., 2009）。地下温度が上昇すると地層からの化学成分の溶出や汚染物質の離脱が促進され、土壌水や地下水の水質だけでなく地下の微生物活動にも影響が生じる。さらに、植物根周りの土壌温度上昇は樹木の開花などの生物季節変化として現れる。なお、この日中共同研究は、地球研のプロジェクト「都市の地下環境に残る人間活動の影響（地下環境プロジェクト）」、平成17-22年度、代表研究者・谷口）を受けて、その成果をさらに中国との比較の形で発展させるものである。

共同研究の中国側の研究代表者は、今回のシンポジウム開催地である西安の西安交通大学全球変化研究院の黄少鵬教授である。黄教授は、アメリカミシガン大学地質学科との兼任であり、上記地球研・地下環境プロジェクトのコアメンバーの一人でもあった。また地球研の招聘外国人研究員として、平成19年度に地球研に滞在した経験をもつ（Huang et al., 2009）。中国の研究グループは他に、福州大学福建省空間信息工程研究中心の陳崇成教授、中国科学院都市環境研究の陳峰博士等である。一方、日本側から今回のシンポジウ



地下温暖化に関する日中合同シンポジウムと参加者



現地調査の様子

ムに参加したのは、筆者に加え、岡山理科大学理学部の北岡豪一教授、(株)地域地盤環境研究所の有本弘孝氏の計3名である。

シンポジウムでは、主に日本の東京・大阪・名古屋と、中国の西安の地下温暖化の結果を中心に議論が進められ、地下温暖化の都市と郊外、農村地域の比較などが議論された。大阪では、1999年と2003年に地下温度広域調査が行われており、今回2011年夏に再測定を行った大阪平野の中心部と郊外約30地点の結果との比較を行った結果、郊外では気温も地下温度も上昇しているが、市街地中心部では気温の上昇は見られないにもかかわらず地下温暖化が進行していることなどが明らかになった。また、復元された地表面温度の履歴は地表面環境の変化の歴史、すなわち、都市化拡大の歴史でもあることから、“地下温度鉛直分布”から“地



---

表面温度の履歴”を復元し、“都市の発達過程”を解析することで、都市の発達過程と地下温暖化の関係を明らかにすることができる。これをもとに、地下環境の将来にわたる変化を予測し、将来における地下熱エネルギーの有効活用の仕方や、地下環境利用の提言を行うことが可能となる。

今後本研究では、中国側のプロジェクトとも共同して、日本と中国で収集された都市の発達過程の異なるアジアの都市（東京、大阪、名古屋、ソウル、台北、バンコク、ジャカルタなど）の既存の地下温

度データ、都市化データ及び気温データを活用して、詳細な定量的解析を実施し、それら諸都市における地表面温度履歴の復元、地下温暖化の将来予測、都市間におけるそれらの比較評価を行い、これら構築した手法を普遍化する予定である。さらに自然と人間活動の影響に由来する気候変動の研究を推進するために、学際的かつ国際的な協力関係のもと、地上及び地下温度に関するオンラインデータベースの構築と、都市化データに関するサブシステムデータの補充によりそのデータベースを拡張する予定である。

---

#### 参考文献

Huang, S. et al. (2009): Detecting urbanization effects on surface and subsurface thermal environment -- A case study of Osaka. *Science of the Total Environment*, 407: 3142-3152.

Taniguchi, M., et al. (2009): Integrated research on subsurface environments in Asian urban areas. *Science of the Total Environment*, 407, 3076-3088.

---

## 关于地下变暖的日中研讨会综述

综合地球环境学研究所 谷口真人

---

我们与中国环境问题研究基地联合主办的日中共同研究“关于亚洲城市中地下变暖的比较研究（代表：谷口真人）”专题研讨会于2011年9月28日—29日在中国西安交通大学举行。中方共同研究人员由西安交通大学全球变化研究院黄少鹏教授担任。研讨会上主要就日中两国的城

市、郊区与农村地区的地下变暖的比较等进行了讨论。还在跨学科与国际合作关系的基础上，就构建有关地上和地下温度的在线数据库、以及城市化相关数据库的扩充计划进行了交谈。

---

## Report of Japan-China workshop on subsurface warming

TANIGUCHI, Makoto

RIHN

---

Comparative Research on Subsurface Global Warming in Asia (Principal Investigator: Prof. TANIGUCHI, Makoto), a workshop for joint research between Japan and China, was held on September 28 and 29, 2011 at Xi'an Jiaotong University in China, and was hosted jointly with the Resource Institute for Humanity and Nature (RIHN) Initiative for Chinese Environmental Issues. The host from China was Professor Shaopeng Huang from the Global

Change Research Institute of Xi'an Jiaotong University. The main topic of the symposium was the comparison of underground global warming in cities, suburbs, and farming villages in Japan and China. Observation results and research plans were discussed regarding the establishment of an online database for ground temperatures and subsurface temperatures, and to expand the database on urbanization via academic and international cooperation.

---

# 国際シンポジウム「乾燥地における開発と環境保全」の報告

龍谷大学政策学部 金 紅実



2010年9月5-6日、龍谷大学社会科学研究所(指定研究:代表北川秀樹)と総合地球環境学研究所(フィージビリティ・スタディ:FS 代表村松弘一)の共同主催の下、陝西省林業庁の協力を得て、「乾燥地における開発と環境保全」をテーマとする国際シンポジウムを西安で開催した。中国では、急速な経済発展を背景に、ダム建設、道路建設などの公共事業、そして鉱山などの大規模な開発が展開しており、森林破壊や砂漠化の進行への影響が懸念されている。とりわけ陝西省北部の半乾燥地域のように、降水量が少なく植生状況が劣悪な沙地では、生態環境の脆弱さが更にプレッシャーとなり、一旦環境が破壊されてしまうと、短期間に回復することはきわめて困難とも言われている。本シンポジウムはこのような情勢を背景に、開発による周辺の自然環境への影響がどのように表れているのか、未然防止の対策を講じるためにはどのような計画や制度が必要となるのか、また、開発によって経済的利益を得た者がどのように環境回復コストを負担し、生態補償制度がどこまで整備され、実施されているか、などを課題に、日中両国の専門者がそれぞれの経験に基づき報告と議論を行った。本シンポジウムでは研究者と実務者が多数参加し、自然科学の視点だけではなく、歴史学、経済学、法政策などの視点から学際的、総合的に考察を行い、乾燥地域の持続可能な発展のあり方について検討を行った。

本シンポジウム終了後、参加者は陝西省北部に位置する毛烏素砂漠地域における鉱山資源開発と周辺生態環境への影響を考察すべく、実地調査を行った。地元の陝西省神木県林業局、及び榆林市榆陽区林業局、陝西省榆林治沙研究所の協力を得て、神木生態協会(中国初の砂漠化対策を目的とする環境NGO)が運営する治沙植生回復モデル事業の現場を見学したほか、内モンゴルのオルドス地域と陝西省神木県の境に位置する中国最大の砂漠淡水湖である紅碱淖を見学し、水資源の利用権をめぐる地方政府間の激しい争いの現場を体験すると同時に、炭鉱開発による湖の水資源の減少や地下水脈の破壊などの現実を目の当たりにした。一方で陝西省神木県林業局を初めとする地方政府部門の政策的誘導に従って、神木県大柳塔鎮露天炭鉱有限会社が炭鉱でここ最近から取り組み始めた生態回復事業の現場を見学した。このほか、約50年の治沙研究の歴史をもつ陝西省榆林治沙研究所の榆林珍稀沙生植物保護基地を見学し、年間降雨量が300-400mmの半乾燥地域における植生回復の可能性と研究成果を見学した。また日本の環境NGOが長年にわたり取り組んできた沙地緑化事業の代表ともされる日中友好生態林基地を見学し、風沙の侵食により日常生活及び農業生産に深刻なダメージを受けてきた地元の農家に、植生回復後の変化や心境について話を聞いた。最後は、中国の西部大開発政策の実施のための自信の根拠となった榆林市榆陽区林業局のモデル生態林場を見学した。



干上がった紅碱淖の湖底  
2011年9月24日撮影(漆喜林提供)



毛烏素砂地における環境NGOによる植生回復事業  
2011年9月7日撮影(谷垣岳人提供)



---

今回の実地調査では、毛烏素沙地の苛酷な自然環境を実体験したほか、これまでの取り組みを通じて比較的成功的な事例を確認し、今後の半乾燥沙地における植生回復事業の可能性を確認できた。しかし同時に、現段階でなお未解決の政策課題や沙地における植生回復技術の開発のあり方、及び生態学や森林科学といった自然科学を含む、学際的な技術交流と研究成果の共有などの必要性を見出した。鉱山開

発の受益者に自然環境の回復コストを負担させるには、どのような仕組みが実効性をもつのか、国の主導で国有企業を中心に行われる資源開発事業の環境要素の評価システムをどのように設計すべきか、開発による成長の果実をどのように生態環境の植生回復事業や被害地域に還元すべきか、などの課題は、今後我々の研究グループが引き続き注目し、取り組んでいくべき研究課題でもある。

---

## “干旱区开发与环境保护”国际研讨会综述

龙谷大学政策学部 金红实

---

2011年9月5-6日、龙谷大学社会科学研究所（指定研究：代表北川秀树）与综合地球环境学研究所（feasibility study：FS 代表村松弘一）的共同策划下，经陕西省林业厅的鼎力协助，在西安举办了以「干燥地区开发与环境保护」为题目的国际研讨会。本次研讨会主要讨论了以下内容的课题。第一，资源开发给周围自然环境所带来的具体影响，及建立防范未然措施所必需发展规划和制度。第二，资源开发的受益者如何承担环境恢复成本。第三，生态补偿机制的发展水平与其实际情况。日中双方的专家和学者，根

据实际经验和学术成果进行了发表和讨论。研讨会结束后，与会专家赴陕西省北部毛乌素沙地，访问了该地区矿产资源开发现场，考察了当地生态环境影响。通过考察，不仅体验了毛乌素沙地极其艰苦的自然环境条件，还亲眼目睹了几十年的不懈努力而实现的较为成功的事例，看到了今后半干旱地区的植被恢复工作的一线希望。同时找出了目前还未能解决的几个政策性课题，和沙地植被技术及生态学、森林农学等自然科学与社会科学之间的跨学科交流与共同协作的必要性。

---

## Report of the international symposium: Development and Environmental Protection in Arid Lands

JIN, Hongshi

The Faculty of Policy Science, Ryukoku University

---

On September 5 and 6, 2010, the Institute of Social Sciences of Ryukoku University, lead by Prof. KITAGAWA, Hideki, and the Feasibility Study of the Research Institute for Humanity and Nature, lead by Dr. MURAMATSU, Koichi, co-organized an international symposium called “Development and Environmental Protection in Arid Lands.” This symposium was co-sponsored by the Forest Department of Shaanxi Province. Japanese and Chinese experts presented empirically-based reports and discussions on several problems, such as what kind of damage development does to the natural environment, what kind of plans and institutes are essential to prevent damages, how a developer who financially benefits from development pays for the cost of environmental restoration, and to

what extent ecological compensation has been prepared and carried out. After this symposium, participants conducted a field survey on the environmental impacts of mining in the Muss Desert in the northern part of Shaanxi Province. In this field survey, we experienced the severity of the natural environment and found a successful example of vegetation restoration and its usefulness in semi-arid deserts. This example is shedding light on the future of vegetation restoration in semi-arid regions. We also found some problems as yet unsolved by environmental policies. Academic communication between natural scientists of ecology and forest science and social scientists is crucial to solve the technical problems that vegetation restoration in deserts is facing.

---

# 天地人総目次（創刊号～17号）

## ◆創刊のことば

地球地域学と地球研

## ◆拠点紹介

地球研に「中国環境問題研究拠点」を設置

## ◆地球研プロジェクト紹介

大気中の物質循環に及ぼす人間活動の影響の解明

## ◆研究会紹介

中国環境問題研究の深化と普及のはざままで

## ◆NPO紹介

木を植えることだけが緑化協力ではない

## ◆エッセイ

四足を食べなくなった日本人

水土の知の「引出し」

## ◆シンポジウム報告

国際シンポジウム「牧畜地域発展フォーラム

および草原の持続的利用」概要

## ◆お知らせ

活動予告

「天地人」について

## ◆巻頭のことば

現代中国と環境研究

## ◆地球研プロジェクト紹介

砂漠化の歴史を映し出す湖の変遷と現代の水問題

## ◆エッセイ

断ち切られた黒河の流れ

## ◆巡検報告

中国における環境 NGO の展開と現在

## ◆シンポジウム報告

中日国際シンポジウム「自然環境と民俗地理学」概要

「自然環境と民俗地理学」中日国際シンポジウムに

参加して

## ◆エッセイ

サルと世界遺産

麗江古城における水信仰と水利用（中国語）

草原は所有権の対象か？

中国の同僚

## ◆巻頭のことば

地球環境問題の変遷と中国環境問題研究拠点の役割

## ◆地球研プロジェクト紹介

「黄河断流」から見えてくる環境問題

## ◆シンポジウム報告

麗江古城環境シンポジウム（2007年10月）の記録

## ◆中国環境問題シンポジウム報告

「社会開発と水資源・水環境問題

に関する国際シンポジウム」報告

## ◆研究機関紹介

中国科学院地理科学与資源研究所の紹介

## ◆環境保全活動紹介

中国における太平洋環境組織

## ◆エッセイ

情報としての自然と環境

食の安全から、環境の保全へ

「黄色い大地」再訪

## ◆巻頭のことば

「環境」の認識から「環境」の地域的・地球的保全へ

## ◆地球研プロジェクト紹介

雲南と生態史プロジェクト

## ◆研究機関紹介

中国科学院青藏高原研究所紹介

## ◆研究保全活動紹介

SEEの環境活動

国境を越える環境保全のネットワーク

中国民間環境保護NGOの歴史と経験

## ◆エッセイ

彼が見た風景

デジャ ヴュ (déja vue)

自然の摂理を心得たものを尊重しよう

四川想起

お知らせ

## ◆巻頭のことば

## 創刊号

### ◆創刊詞

地球地域学と地球研

### ◆基地紹介

写在“中国环境问题研究基地”在地球研成立之际

### ◆地球研項目紹介

人类活动对大气中的物质循环影响的分析

### ◆研究会介绍

中国环境问题研究的深化与普及的媒介

### ◆NPO紹介

只种树，不能说是绿化支援

### ◆小品文

已经不吃四足动物的日本人（日语版）

水土之智

### ◆学术研讨会综述

“牧区发展论坛暨草地资源可持续利用”

国际学术研讨会综述

### ◆最新动向

今后的介绍

关于「天地人」

## 1号

### ◆前言

当代中国与环境研究

### ◆地球研項目紹介

湖泊变迁见证沙漠化历史和当代水资源问题

### ◆小品文

断流的黑河

### ◆巡検報告

环境 NGO 在中国的活动情况

### ◆学术研讨会综述

“自然環境と民俗地理学”中日国際学术研讨会综述

参加“自然環境と民俗地理学”

中日研讨会的心得（日语版）

### ◆小品文

金丝猴与世界遗产

丽江古城关于水的信仰和用水民俗

草原岂能成为所有的对象？（日语版）

我的中国合作伙伴（日语版）

## 2号

### ◆前言

全球环境问题变迁与中国环境问题研究基地的任务

### ◆地球研項目紹介

从“黄河断流”看环境问题

### ◆学术研讨会综述

“丽江古城环境研讨会（2007年10月）”纪要

### ◆中国环境问题学术研讨会综述

“社会开发与水資源・水环境问题国际会议”概要

### ◆研究机构介绍

中国科学院地理科学与資源研究所

### ◆环保活动介绍

太平洋环境组织在中国

### ◆小品文

浅析作为信息的自然和环境（日语版）

为保护环境而确保食品安全

重访“黄土地”（日语版）

## 3号

### ◆前言

对“环境”的区域性及全球性的

保全始于对“环境”的真正认识

### ◆地球研項目紹介

云南及生态史研究项目

### ◆研究机构介绍

中国科学院青藏高原研究所简介

### ◆环保活动介绍

SEE的环境行动

超越国境的环境保护网

中国民间环保 NGO 的历史与经验

### ◆小品文

他所看到的景观

Déja vue

了解自然规律的人最值得尊重（日语版）

四川隨想（日语版）

最新动向

## 4号

### ◆前言

立本成文 2

中尾正義 4

早坂忠裕 6

大塚健司 8

上田信 10

佐藤洋一郎 12

渡邊紹裕 13

単平 14

15

16

毛里和子 2

中尾正義 4

井上充幸 7

児玉香菜子 8

色音 10

思沁夫 11

秋道智彌 12

楊福泉 14

奥田進一 15

阿部健一 16

中尾正義 2

福嶋義宏 4

朱安新 6

銭新 8

宋献方 10

温波 12

榎根勇 13

小長谷有紀 15

井上隆史 16

金田章裕 2

秋道智彌 4

姚檀棟 6

鄧儀 8

李淑炫 10

郝冰 12

村松弘一 13

応地利明 14

袁広泉 15

阿部健一 16

16



中国環境問題研究の重要課題

◆地球研プロジェクト紹介

巨大魚付林の保全をめざして

◆エッセイ

木材ブームと国境の街

◆先を見る芽

環境疾患予防学事始

◆研究機関紹介

中国政法大学公害被害者法律援助センターの活動紹介

「日中林業生態研修センター計画」の紹介

◆特集—フィールドレポート

SARS と雲南エコツーリズム

黒河の水問題

張掖のオアシスに滞在して

チャンタン高原の旅から

◆巻頭のことば

「禍福おりなす大地」

◆地球研プロジェクト紹介

これからの農業と暮らしのかたちを求めて

◆研究機関紹介

国立環境研究所の歩みと現在

◆中国環境問題研究シンポジウム報告

日本と中国における食と環境に

関する国際シンポジウムの概要

成長とどうつきあうか

◆環境保全活動紹介

森林科学の分野における日中学術交流

中国の沙漠に緑化の実践を

◆エッセイ

中国農具調査余話

唐代喫茶文化の担い手と日本への影響

人間が水に優しく、水が人間に利を捧げる

お知らせ

◆巻頭のことば

中国環境問題研究の国際的ネットワーク形成にむけて

◆地球研プロジェクト紹介

「地球研エコヘルスプロジェクト」

◆研究機関紹介

新疆文物考古研究所の紹介

◆研究会紹介

雲南省健康と発展研究会とエコヘルス

◆フィールドレポート

生活の豊かさと青い山を求めて

◆シンポジウム報告

遊牧文明を源とする草原文化の現在

◆エッセイ

東方アジアの夢

反転する中国史

ウと生きる、ウが活きる

お知らせ

◆巻頭のことば

中国の食にみる南船北馬

◆フィールドレポート

バイオエタノールと中国農業の現段階

◆研究機関紹介

江蘇省農業科学院紹介

◆環境研究動向

中国における環境研究

◆エッセイ

バイオ燃料は、みる目が必要

中国の石油政策と複眼思考

遺伝子組換え作物

遺伝子組換え作物と有機農法

西湖のほとりで

日本のお茶とお米

お知らせ

◆巻頭のことば

中国環境問題への歴史資料的貢献の模索

◆地球研プロジェクト紹介

東アジア内海の新石器化と現代化

◆環境保全活動紹介

ホルチン沙地東部における緑化活動

◆特集—環境史

台湾における環境史研究

当今中国環境問題研究の重点

◆地球研項目紹介

立志于大規模漁業林の保護

◆小品文

木材貿易熱と边境城市（日本語版）

◆新研究紹介

環境疾病防治学の开端（日本語版）

◆研究机构紹介

中国政法大学汚染受害者法律帮助中心の活動簡介

“中日林業生態培训中心項目”簡介

◆特輯—实地考察報告

SARS と雲南生態旅遊

黒河之水（日本語版）

沙漠緑洲逗留記（日本語版）

羌塘高原之旅（日本語版）

5号

◆前言

禍福交織の大地

◆地球研項目紹介

今後の農業システム及人類の生活方式

◆研究机构紹介

国立環境研究所の歴史と現状

◆中国環境問題学術研討会綜述

糧食と環境国際学術研討会（2008年11月）紀要

経済発展と我々の使命

◆環保活動紹介

森林科学領域の中日学術交流（日本語版）

在中国沙漠上進行的緑化実践（日本語版）

◆小品文

中国農具調査逸聞（日本語版）

唐代喫茶文化の中堅人物和其對日本の影響（日本語版）

人利水と水利人

最新動向

6号

◆前言

确立中国環境問題研究国際ネットワーク

◆地球研項目紹介

“地球研の生態健康項目”紹介

◆研究机构紹介

新疆文物考古研究所簡介

◆研究会紹介

雲南省健康と発展研究会和生態健康研究理念

◆实地考察報告

經濟發展與環境保護共贏的農村開發模式

◆学術研討会綜述

以游牧文明為傳統的草原文化

◆小品文

東方亞洲之夢

重審中國史

与活跃的鸕鷀一起生活（日本語版）

最新動向

7号

◆前言

中国食物所体现的南船北马

◆实地考察報告

生物乙醇与中国農業的现状

◆研究机构紹介

江蘇省農業科学院簡介

◆環境研究動向

中国的环境研究

◆小品文

审视生物燃料

中国的石油政策及其多視角审视

转基因农作物（日本語版）

转基因农作物与有机农法（日本語版）

在西湖旁边

日本の茶葉と稻米（日本語版）

最新動向

8号

◆前言

摸索历史資料对中国環境問題貢獻的方法

◆地球研項目紹介

東亞内海的新石器化与現代化

◆環保活動紹介

科尔沁沙地東部的緑化活動（日本語版）

◆特輯—環境史

台灣環境史研究簡介

鄭 躍 軍 2

白 岩 孝 行 4

山 根 正 伸 6

川 端 善 一 郎 7

櫻 井 次 郎 8

成 海 政 樹 10

吉 野 正 敏 12

窪 田 順 平 14

長 野 宇 規 夫 15

山 本 紀 夫 16

平 野 健 一 郎 2

鞍 田 崇 4

大 塚 柳 太 郎 6

湯 陵 華 8

笠 松 浩 樹 10

箕 輪 光 博 12

藤 田 佳 久 13

渡 部 武 14

木 村 栄 美 15

陳 菁 16

窪 田 順 平 2

門 司 和 彦 4

伊 藤 敏 雄 6

蔡 国 喜 8

蔣 宏 偉 10

NAMJILIN, Bold 12

立 本 成 文 14

高 津 孝 15

卯 田 宗 平 16

16

佐 藤 洋 一 郎 2

田 島 俊 雄 4

王 才 林 6

張 冬 雪 8

福 井 希 一 10

秋 道 智 彌 夫 12

藤 岡 典 夫 13

中 村 郁 郎 14

山 口 聰 視 15

中 川 博 16

16

高 田 幸 男 2

槇 林 啓 介 4

成 田 正 之 6

劉 士 永 8

# 天地人総目次 (創刊号～17号)

歴史上の黄海・渤海における真鯛資源量の変動と原因  
天地と対話する身体

◆エッセイ

山形と中国ドキュメンタリー  
彼女は安価な労働力になりたくなかった  
消えゆく水と現れでる碑  
お知らせ

◆巻頭のことば

COP15 と中国の環境・経済問題

◆地球研プロジェクト紹介

「病原生物と人間の相互作用環」の日中共同研究

◆研究機関紹介

東洋大学アジア文化研究所による中国環境問題への取り組み

◆特集—黄土高原

黄土高原の緑とその将来  
中国の山野で植生の回復が始まった  
雑草を抜かない抵抗  
「結皮」  
日本の農業と食料の現状と未来  
大衆動員型植林から内発型植林へ

◆巻頭のことば

バイザーのなげき

◆地球研プロジェクト紹介

人の生老病死と高所環境

◆シンポジウム報告

中国西南文化と環境高級学術論壇の概要

『中国西南文化と環境高級学術論壇』の巡検企画

◆環境保全活動紹介

中国の環境教育

◆エッセイ

草原の思考  
長江・水田地帯の経済適応  
「天・地・人」

◆巻頭のことば

地球環境問題と多様性

◆シンポジウム報告

NIHU 現代中国地域研究・拠点連携プログラム第3回  
国際シンポジウム「環境問題—中国の未来可能性」

第3回国際シンポジウム「環境問題—中国の未来可能性」への4つの問題提起

第3回国際シンポジウム「環境問題—中国の未来可能性」に参加して

◆環境問題研究動向

人と自然が調和する都市計画

◆シンポジウム報告

国際シンポジウム「中国の都市化の進展と環境問題」

◆研究機関紹介

復旦大学歴史地理研究中心の紹介  
陝西師範大学西北歴史環境と経済社会発展研究中心の紹介

◆環境保全活動紹介

統万城緑色都市回復基地 2002—2010年植樹状況調査報告  
お知らせ

◆巻頭のことば

「違い」を知ることこそ日中協力のカギ

◆環境問題研究動向

書評：包茂紅『中国の環境ガバナンスと東北アジアの環境協力』

◆プロジェクト紹介

雲南少数民族の水文化・水環境の変遷の研究

◆シンポジウム報告

第七回中国災害史国際学術シンポジウム参加報告

◆特集—環境と健康 (エコヘルス)

雲南マラリア地域の変遷  
1930年代台湾における水利開発とマラリア流行  
中国における社会環境とエイズ・性病の流行状況  
お知らせ

◆巻頭のことば

地球温暖化防止へのローカル・イニシアティブ

◆環境問題研究動向

历史上黄渤海真鯛資源数量の变动及原因  
天地と対話の身体

◆小品文

山形与中国纪录片  
她不想成为廉价劳动力  
水消碑現  
最新动向

9号

◆前言

COP15 と中国の環境・経済問題

◆地球研項目紹介

“病原生物と人間の相互作用環”の日中共同研究

◆研究机构紹介

東洋大学アジア文化研究所对中国環境問題の研究

◆特集—黄土高原

黄土高原の植被及其未来  
中国山野地区的植被已开始恢复  
顺其自然的绿化工程—不除草的革命 (日语版)  
结皮 (日语版)  
日本の農業及食料の現状和未来  
从大众动员造林向自发性造林的转型 (日语版)

10号

◆前言

白鬚豚の悲叹

◆地球研項目紹介

人类的生老病死与高地环境

◆学术研讨会综述

首届中国西南文化与环境高级学术论坛综述

“中国西南文化与环境高级学术论坛”的考察

◆环保活动紹介

中国的环境教育

◆小品文

草原的思路 (日语版)  
长江稻田地带的经济适应  
“天地人”

11号

◆前言

地球环境问题与多样性

◆学术研讨会综述

当代中国地区研究基地联合项目第三届国际会议  
“环境问题：中国的未来可能性”

当代中国与环境问题—四个挑战 (日语版)

参加第三届国际学术会议“环境问题：(日语版)  
中国的未来可能性”的体会

◆环境问题研究動向

人与自然和谐相处的城市规划策略

◆学术研讨会综述

“中国的城市化进程与环境问题”国际研讨会综述

◆研究机构紹介

复旦大学历史地理研究中心简介  
陕西师范大学西北历史环境与经济社会发展研究中心介绍

◆环保活动紹介

让绿色重新拥抱统万城—统万城绿色都市恢复基地 2002—2010年植树情况调研报告  
最新动向

12号

◆前言

了解“不同”才是日中合作的关键

◆环境问题研究動向

包茂宏《中国环境监督机构以及  
东北亚洲环境合作》书评提要

◆項目紹介

云南少数民族水文化与水环境变迁研究:探索、成就和结论

◆学术研讨会综述

参加第七届中国灾害史国际学术研讨会的体会

◆特集—環境と健康 (生态健康)

雲南瘴氣區域的變遷  
1930年代臺灣水利開發與瘧疾流行  
中国的社会環境和艾滋病、性病的流行情况  
最新动向

13号

◆前言

防止地球温暖化的地方主动性

◆环境问题研究動向

李 玉 尚 10  
真 柳 誠 11  
藤 岡 朝 子 12  
馮 黒 艶 14  
井 黒 忍 16  
最新动向 16

田 島 俊 雄 2  
川 端 善 一 郎 4  
飯 塚 勝 重 6  
山 中 典 和 8  
前 中 久 行 子 10  
深 尾 葉 彦 12  
等 々 力 政 彦 13  
山 田 利 昭 14  
関 良 基 16

秋 道 智 彌 2  
奥 宮 清 人 4  
黄 柏 権 6  
佐 藤 廉 也 8  
R o b E f i r d 10  
篠 原 徹 12  
楨 林 啓 介 14  
楊 志 強 16

中 尾 正 義 2  
松 永 光 平 4  
毛 里 和 子 5  
相 川 泰 5  
一 ノ 瀬 俊 明 6  
鄒 怡 8  
満 志 敏 10  
侯 甬 堅 12  
張 憲 功 14  
最新动向 16

天 児 慧 2  
原 宗 子 4  
鄭 曉 雲 6  
福 士 由 紀 8  
周 瓊 10  
顧 雅 文 12  
蔡 国 喜 14  
最新动向 16

植 田 和 弘 2



書評：佐藤洋一郎監修『ユーラシア農耕史』全5巻

◆シンポジウム報告

国際シンポジウム「西南中国の開発と環境・生業・健康」  
国際シンポジウムに参加して

「西南中国の開発と環境・生業・健康」(中国語)  
の中心思想と特色

◆研究機関紹介

雲南大学西南边疆少数民族研究中心の紹介

◆特集—生物多様性

雲南のキノコ食について  
樹種同定と日中の木の文化  
環境の再生の「緑」を考える  
研究会報告

◆巻頭のことば

技術開発における先発者と後発者

◆シンポジウム報告

アムール・オホーツクコンソーシアム  
第2回会合準備ワークショップ報告

◆プロジェクト紹介

九州大学東アジア環境研究機構の紹介

◆シンポジウム報告

九州大学における中央アジア・東アジアにおける  
環境変動・砂漠化防止に関する国際シンポジウム

第2回 森林をめぐる伝統知と文化  
に関する国際会議「里山と多様性」

◆特集—国際森林年

持続的な森林管理における森林  
文化と伝統知識の役割の再定義

陝西省における林業の発展の現状、問題点、その対策  
中国の森林問題をめぐる構図  
研究会報告

◆巻頭のことば

Third Pole 論と研究者の立場

◆環境問題研究動向

書評：秋道智彌編『水と文明』

書評：李玉尚『海有豊歉』

◆研究プロジェクト紹介

中国のきれいな水をめぐる新たなネットワークの構築

◆特集—中国の環境と文化

環境状況の悪化と環境研究の「繁栄」

内モンゴル草原における牧畜業  
の合作経済組織発展の道と選択

中国に生きるミャオ族とミャオ語

研究会報告

◆巻頭のことば

私版現代中国地域研究

◆環境問題研究動向

中国東南山岳地帯の開発の道

◆研究プロジェクト紹介

アムール・オホーツクコンソーシアムの設立と運営

FS 研究「東アジア生業交錯地域

における水と人間の歴史と環境」

◆特集—中国の環境ガバナンス

中国の環境ガバナンス改善の課題

『環境保護法』を限定的に修正する有効な方法を論じる

中国の環境司法と環境公益訴訟の新展開

不可抗力に対処する

研究会報告

◆巻頭のことば

中日両国の環境保護協力を強化し、共に美しい未来を創る

◆環境問題研究動向

書評：中国環境問題研究会編

『中国環境ハンドブック 2011 年度—2012 年度』

◆環境保全活動紹介

世界の屋根で新たな道をたどる

◆シンポジウム報告

地下温暖化に関する日中合同シンポジウムの報告

国際シンポジウム「乾燥地における開発と環境保全」の報告

◆総目次

天地人総目次(創刊号~17号)

研究会報告・お知らせ

書評：佐藤洋一郎監修《欧亚农耕史》(五巻本)

◆学术研究会综述

国際研讨会“西南中国の開発と環境・生計・健康”  
参加国際研讨会(日本語版)

“中国西南の開発と環境・生計・健康”  
国際研讨会の主題と特点

◆研究机构紹介

云南大学西南边疆少数民族研究中心简介

◆特辑—生物多样性

关于云南的蘑菇食用情况  
木材鉴定及中日本文化的研究  
反思环境再生的“绿色”  
研究会报告(日本語版)

14号

◆前言

技术开发领域的先行者和后发者

◆学术研究会综述

阿穆尔与鄂霍次克联盟第二届大会筹备会议的工作报告

◆项目介绍

九州大学东亚环境研究机构の紹介

◆学术研究会综述

关于中亚和东亚地区环境变化以及防止土开  
地沙漠化的国际学术研讨会在九州大学召

第三届森林传统知识与文化国际会议综述

◆特辑—国际森林年

重构森林文化和传统知识在林业发展中的作用

陝西林业发展现状与对策

有关中国森林问题的整体结构

研究会报告(日本語版)

15号

◆前言

第三极(Third Pole) 论与学者的立场

◆环境问题研究动向

書評：秋道智彌編《水と文明》

書評：李玉尚《海有豊歉》

◆研究项目介绍

围绕中国的干净水问题构筑新的网络

◆特辑—中国的环境与文化

环境情况的恶化与环境研究的“繁荣”

内蒙古草原畜牧业合作经济发展路径与选择

生存于中国的苗族与苗语

研究会报告(日本語版)

16号

◆前言

私版 当代中国地区研究

◆环境问题研究动向

中国东南山区的开发之道

◆研究项目介绍

阿穆尔·鄂霍茨克联盟的设立与运作

FS 研究“东亚生业交错地区的水与人的历史与环境”

◆特辑—中国的环境治理

中国环境治理改善的课题

论有限修改《环境保护法》的有效方法

中国环境司法和环境公益诉讼新进展

应对不可抗力

研究会报告(日本語版)

17号

◆前言

强化中日两国的环境保护协作,共创美好未来

◆环境问题研究动向

書評：中国环境问题研究会編

《中国环境手册 2011—2012 年版》

◆环保活动介绍

在世界顶上追索新的道路

◆学术研究会综述

关于地下变暖的日中研讨会综述

“干旱区开发与环境保护” 国际研讨会综述

◆总目録

天地人总目録(創刊号~17号)

研究会報告、最新动向(日本語版)

西谷 大 4

松永光平 6

門司和彦 7

包茂紅 7

何 明 8

湯本貴和 10

Mechtild Mertz 12

Altanqimuge 16

井村秀文 2

大西健夫 4

大槻恭一 6

鹿島 薫 8

顧 鴻 雁 9

劉 金 龍 10

郭 俊 栄 12

平野悠一郎 14

16

米本昌平 2

中尾正義 4

市川智生 6

Peter Marsters、LIU, Kexin 8

張 玉 林 10

A o r e n q i 12

田口善久 14

16

渡邊幸治 2

鄒 怡 4

白岩孝行 6

村松弘一 8

北川秀樹 9

汪 勁 10

呂 忠 梅 12

Rhett Harrison 14

16

劉 毅 仁 2

秋道智彌 4

Peter Wiegand 6

谷口真人 8

金 紅 実 10

12

16

## ◎研究会報告

2011年10月～2011年12月、中国環境問題研究拠点では以下のワークショップ・研究会を開催しました。プログラムの詳細は拠点ホームページ (<http://www.chikyu.ac.jp/rihn-china/>) をご覧ください。

**第13回 中国環境問題ワークショップ**  
「中国の環境と健康問題」  
(2011年10月20日；総合地球環境学研究所)  
報告 王光沢 (海南省疾病管理センター) ほか

海南省疾病管理センターではマラリア・職業病の予防対策を重点的に行い、実験設備を用いて実証的研究も行っている。総合地球環境学研究所のエコヘルス・プロジェクトでは、熱帯アジアを舞台に、環境・文化と健康との関係の解明に尽力している。

**第14回 中国環境問題ワークショップ**  
「インド・中国のメガ・シティ：変容する都市環境」  
(2011年10月22日；総合地球環境学研究所)  
報告 Jagan Shah  
(Sushant School of Art & Architecture)  
報告 Terry G. McGee (総合地球環境学研究所)

インドと中国ではメガ・シティの発達が著しい。これからのインドのメガ・シティ研究では、これまで、アクセスが困難でリスクと考えられた地域や問題に踏み込んでいくことが重要となってくる。中国のメガ・シティは、都市・農村間の関係強化の取り組みやさまざまなレベルでの政府の働きにより、持続可能性を確保しようとしている。

**第15回 中国環境問題ワークショップ**  
「中国持続可能な発展と森林保全政策の発展と課題」  
(2011年11月14日；龍谷大学)  
報告 劉璨 (中国国家林業局森林経済研究センター)

中国では砂漠化が進む一方、大規模な森林再生事業が実施され、効果を上げている。

**第16回 中国環境問題ワークショップ**  
「中国の環境史・人口史研究の現状とGISの活用」  
(2011年11月14日；龍谷大学)  
報告 路偉東 (復旦大学歴史地理研究中心)  
報告 史紅帥 (陝西師範大学西北歴史環境与経済社会発展研究中心)

復旦大学では中国の歴史時代の地理情報データベースを公開してきた。陝西師範大学では西安(旧長安)付近を流れる渭河の河道変遷や災害発生データベースを構築しつつあり、公開準備中である。

**第28回中国環境問題研究会**  
「地球規模水銀汚染と胎児影響及び中国での調査報告」  
(2011年12月14日；総合地球環境学研究所)  
報告 坂本峰至 (国立水俣病総合研究センター)

アジアは、化石燃料燃焼により世界の環境中の水銀の三分の一を排出している。中国貴州の水銀鉱山では労働者に曝露と軽微な健康影響が観察された。

**第29回中国環境問題研究会**  
「生態環境と調和した地域開発戦略」  
(2011年12月15日；総合地球環境学研究所)  
報告 衣保中 (京都大学地域研究情報統合センター  
吉林大学東北アジア研究中心)

産業立地の稠密化、都市と農村の総体的発展などが中国の生態環境と調和した地域開発の鍵である。

## ◎お知らせ

中国環境問題研究拠点が参画している人間文化研究機構地域研究推進事業「現代中国」は2012年4月

から第二期(2017年3月まで)に入ります。

発行日 2012年3月25日

編集・発行

中国環境問題研究拠点

〒603-8047 京都府京都市北区上賀茂本山 457-4

総合地球環境学研究所

TEL 075-707-2462 FAX 075-707-2513

<http://www.chikyu.ac.jp/rihn-china/>

製作・勉誠出版

Date of Issue March 25, 2012

Edited and Published by

RIHN Initiative for Chinese Environmental Issues

457-4 Motoyama, Kamigamo, Kita-ku, Kyoto, 603-8047 Japan

Research Institute for Humanity and Nature

TEL: +81-75-707-2462 FAX: +81-75-707-2513

<http://www.chikyu.ac.jp/rihn-china/>

Produced by BENSEY PUBLISHING INC.